
俺はhero

tomato

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺はhero

【Nコード】

N2106BA

【作者名】

tomato

【あらすじ】

少年は英雄になりたかった、だから戦争に行った、そして同じ時代の敵国の少女と戦うことになった。彼がどんな英雄譚を辿ったのか、それは――

自信過剰な始まり

俺はこの国では平民としての地位を持つ。

俺の国アレイルは豊潤な土地と資源に溢れていて、貧困もなく平和で素晴らしい国だった。

あの国リストルゼンが攻めて来るまでは・・・

昨年大きな冷害にあったリストルゼンはこの国に攻め入ってきた。豊富な資源のおかげでなんとか均衡を保っているものの平和ボケした市民と兵士の混合軍ではそうもいかない。

国のお抱えの貴族の騎士は死にもならない、後方でさっさと敵を討てと喚いてばかりだという。

「行ってくるよ母さん・・・俺絶対に帰ってくるから」

「ゼイル・・・お前は優しい子だから心配だよ・・・」

「心配しないでよ母さん、必ず帰ってくるから・・・」

と、横目でしっかり死亡フラグを立てている村の一農民を眺める。

俺？俺は親などいない、昔死んだそうだ、まあそんなことはどうで

もいい。

それより重要なのはこの戦のことだ、これは革命のチャンスなのだ。何もしないグズ共と攻め込んできたリストルゼンを潰すための。精々いい的になってくれよ・・・そう思いながら徴兵の荷馬車に乗る。

「そうさ・・・俺には知識がある、簡単には死なないさ」

俺には前世の知識がうるおぼえながら有る・・・それをいかしてこの戦で必ず貴族になってみせる。

「レオン行ってらっしゃい」

ふと俺の名前が呼ばれる。

「リオ・・・ああ、行ってくる」

この村での唯一の理解者、俺が貴族になった暁には彼女を妻にするんだ・・・。

そう決意を固めて俺は荷馬車から遠ざかる村を見ることを止めた。

それに、俺は村で一番強いし、どういうわけかすごい怪力だしなこれなら俺TUEEが簡単にできるだろう。

今からワクワクして興奮してしまう、早く戦いたい武勇を上げたい。

少年早くも自信喪失

徴兵されて初めにやったことは長槍を持つことだった。

「なんだこれは・・・」

冗談じゃない、どうして俺がこんなことをしなければならないのだ。
俺は剣でバツバツと敵をなぎ倒せるのに・・・

「そこ隊列を乱すな！」

「は、はい！」

思わず返事をしてしまったがあのクソ教官め、絶対に許さないからな、戦闘中にどさくさに紛れて殺してやる。

そんなことを想いながら大して身にも入らない訓練をする、早く戦争したいな。

そう考え二週間が経った頃だった、同じ事の繰り返し、俺は周りのやつらと同じ動きを何も考えずにやればいいだけだった。

こんなに頑張ったのになぜ誰も俺に見向きもしないのだ？

まあいい初陣の織りに絶対に思い知らせてやる。
俺こそが真の英雄だということをな。

その時いきなりいつもはならない金属の銅鑼を叩く音が鈍く響いた。

「敵影確認！」

それと同時に慌てて陣営テントに駆け込んでくる士官。
確かこいつはこの間死亡フラグを立ててたやつだな。
奇襲のようで誰も彼もが驚き慌て浮き足立っている。

ここだ、ここで俺は言うべきだ！

「落ち着け！！」

「・・・・・・・・」

決まった・・・最高に決まった、どうだいクソ教官？俺の有能性が
分かったかい？

「まずは戦況確認だろ！」

「あ、ああ、そうだなそれで？敵の数はいくらだ？」

落ち着きを取り戻した教官がさつき入ってきた奴に尋ねる。

「砂埃でよくわかりませんがおそらく１０００はこえるかと」

「ふん、なんだそれだけか？」

こっちは３０００居るんだぞ？３倍の敵に無謀な奴らだな。

「は、はい、しかしかなりのスピードで陣営内を荒らしまわっています！」

「ええい！お前らは何をやっているのだ！」

「捉えようとしているのですが相手は馬でして」

「ならばこちら馬を出せ！早く！！」

「は、はいいい！！」

そういつて彼は外に出たものの砂埃で何がなんだか。

すぐに彼は俺たちの目の前で通りがかった兵士に撫で斬りにされて死んだ。

肩から血を吹き出しながら倒れていく彼を見て俺は戦争を勘違いしていたと気づいた、俺は・・・本当に、馬鹿だったんだ。

馬に乗って通り過ぎた兵士と一瞬目があつた、深い憎しみと怨嗟の目だ、怖い・・・彼らが。

「ええい！バカにしおつて！騎士を集めろ！追うぞ！」

撤退を始めた敵に怒り心頭で動ける騎士を集め追っていく馬鹿貴族を呆然と見送り、周りの惨状を見る。人は多くて百数人が死体として転がっていて、テントは燃え、馬鹿な貴族が後生大事にしまい込んでいた宝石の入った箱が空のまま転がっていた。

夜になっても騎士を連れて行ったバカ貴族は帰ってこなく、文官が
国に文を送ったが、帰還は却下された。
そんな、嘘だ・・・もう帰りたい。

最初の気持ちはとうに忘れ、今はただ敵が恐ろしい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2106ba/>

俺はhero

2012年1月5日11時46分発行